

忘れてもなお残るもの

1. 教育を考える一言

「学校で学んだことを一切忘れてしまった時になお残っているもの、それこそ教育だ。」

2. 背景

私の出身大学で「教育原理」の講義を担当されたある先生が、初回の授業で「教育を語った偉人たち」を紹介してくれました。その当時から、「学校で学んだことを一切忘れてしまった時になお残っているもの、それこそ教育だ」という言葉が私の記憶に焼き付き、印象に残っています。この言葉は、「20 世紀最大の物理学者」や「現代物理学の父」などと称されるドイツ生まれの物理学者、アインシュタイン（Albert Einstein, 1879-1955）が残した言葉です。

3. 考察

その当時、講義中の私は、アインシュタインの言葉に共感し「まさにその通りだ」と思いました。ただただその言葉の魅力に取り付かれ、思案を巡らすことはありませんでした。

しかしながら、今、この言葉について思案を試みることで以前のアインシュタインの言葉の受け取りとは異なったかたちで、教育者としての教授のアイディアを私に与えてくれます。その手がかりは、自身で「学校で学んだことを一切忘れてしまったとき残っているもの」それは何かを振り返ってみることで。教師の指導方法や指導技術に感心がある私にとって、自分自身の学校生活を振り返り、忘れてもなお残るものを「教師の指導、姿勢、言葉」という観点から自分自身で見つめ直すことで、子どもたちの心に刻む上での1つのヒントがそこに隠れているのではないかと思えます。

教育者として自分の指導が「忘れてもなお残るもの」であったかを評価することは難しいかもしれません。しかし、自らの指導を振り返り、絶えず指導の試行錯誤を繰り返していくことと、子どもと真剣に向き合い、情熱をもって指導していくことがそれに繋がっていくと私は考えています。

参考文献

ジェリー・メイヤー、ジョン・P・ホームズ編（ディスカヴァー21 編集部訳）『アルベルト・アインシュタイン 150 の言葉』ディスカヴァー・トゥエンティワン、1997 年
三宮 真智子『メタ認知-学習力を支える高次認知機能』北大路書房、2008 年